



FUKUOKA
ASIAN
ART
MUSEUM

記録と表現の 2カ月を振り返って

成果展の終わりが近づく3月3日。2022年度福岡アジア美術館アーティスト・イン・レジデンス事業(第Ⅲ期)に参加したドクペルー[ホセ・パラド&ヒメナ・モーラ](ペルー)、下寺孝典[タイヤ](大阪)、長野櫻子(福岡)がアーティストカフェに集結。本誌編集部をまじえ、約2カ月におよぶ福岡滞在と作品制作を通して感じとったことをざっくばらんに振り返ります。

あじびニュース編集部(以下:編集部)今回の成果展テーマは「記録と表現—立ち止まり、また見直す」。制作の過程で、福岡で生きる人々とその日常に触れるという部分がみなさんの作品に共通していると思いますが、それぞれ印象に残ったことは何ですか。

ドクペルー/ホセ・パラド(以下:ホセ)印象的なことはあり過ぎるほどですが、滞在で出会ったみなさんは、自分の経験について惜しみなく話してくれました。外国人の私たちに対しても興味をもって接してくれたし、スーパーや道端ですれ違う人までもコミュニケーションやつながりをもつきっかけを与えてくれました。

下寺孝典(以下:下寺)「福岡の屋根」が作れたことです。そのすべては3年前の屋台職人の赤城さんとの出会いが出发点でした。初めてお会いする前から、僕は赤城さんが作る屋台の屋根が美しいと思ってきました。面会を重ねるうちに少しずつ心の距離が近くなり、今回一緒に「屋根」を作らせてほしいとお願いしたら、「それなら一緒に」と言ってくださって。それまでのやりとりが一つにつながったような気がしました。赤城さんも職人として「美術館で展示するならいいものを作りたい」と本気になって挑んでくれました。

長野櫻子(以下:長野)

私の場合、岐阜から就職で福岡に戻ってくるタイミングでコロナが蔓延し始めました。自分の部屋ですっと過ごす状態が続く一方、テレビの中では、数字としてこの街にいる人が可視化されていて。そんな実生活との乖離が自分にとっては衝撃というか…。福岡に住む人のコロナ禍での日常をテーマにアニメーション《それぞれの日々》(成果展では予告編を

上映)をつくるにあたり、7名の方にインタビューしましたが、みなさんそれぞれに私が想像できない世界(環境下)で生活されていたことを実感しました。お話を聞いて理解する部分と、実体験を伴わなければ本当にわからないということも含めて。話を聞けば聞くほど、私も大きな社会のなかの一人として生きていると感じましたね。

編集部:ドクペルーとして撮ったうきは市の松野さん一家のドキュメンタリー作品《緑よ、私の愛する緑》もそうですが、ドキュメンタリー映像制作ワークショップ

「記憶を編む」(以下WS)参加者による4作品のストーリーもまた、一人ひとりの日常にある人間ドラマを丁寧に記録し、見る側の私たちのささやかな日々さえも優しく肯定してくれる温かさを感じました。

ホセ:福岡のみなさんで行ったWSのなかでは毎日、毎分、毎秒、が新しい挑戦でした。とはいえ、自分たちには過去20年間、南米で行ってきたドキュメンタリー制作に対する明確な理論とアプローチがあったので、日本だから特別なものにといいよりは、共感してもらえることを考えましたね。幸いそのアプローチはポジティブな結果をもたらしてくれました。様々な言語や歴史、記憶の差異はあったけれども、それらを乗り越え、人間性という核心の部分でみなさんにつながる体験ができたことは良かったと思います。

ドクペルー/ヒメナ・モーラ(以下:ヒメナ):常々私たちは、ドキュメンタリーとは権力をもった一部の人だけを対象に描かれるものではないと思っています。いわば名も無い人たちのストーリーを書くということが重要であり、今回100歳の画家である斎藤秀三郎さんや福岡で活版印刷を守り続ける山田善之さんなど、忘れられてはならない(その人だけしかもちえない)貴重な歴史の記録を、誰もが見られる形で残せたことは満足しています。

編集部:過去から現代に息づく様々な記憶の記録。それらに対して「屋台」の視点からどのようにアプローチされたのでしょうか。

下寺:滞在中は、「屋台の生態系」を軸に赤城さんが作られた屋台が福岡でどう使われているのか知りたくなり、夜な夜な飲みに行きました。なんで私がこれほど彼女に注目したかという、福岡の数ある屋台の大半を赤城さんが手がけてこら



▲ドクペルー《緑よ、私の愛する緑》展示風景
撮影:竹藤 龍祐



▲長野櫻子《それぞれの日々》展示風景
撮影:竹藤 龍祐



◀下寺孝典[タイヤ]《福岡の動く屋根》
展示風景 撮影:竹藤 龍祐

Artist in Residence Program at Fukuoka Asian Art Museum



▲ 下寺孝典 トーク&パーティー「動く屋根の下で」
(2/25開催) 撮影:竹藤 龍祐

れたからです。屋台と聞くとどうしても“営業者”の方に目を向けられがちですが、そこにはインフラの整備を担うれっきとした“作り手”がいるということを改めて見つめ直したかった。

編集部:下寺さんがつくる“動く屋根”もそういうメッセージのひとつであると?

下寺:今回の動く屋根を通して、高い技術や精神性をもって屋台が形づくられていることやその背後に後継者がいないなどの諸問題もメッセージに含めました。作品として屋台を作る身としては、技術の習得まではできないにしても、まずは記録して屋台づくりの職人の時間に関わりたかった。昨今の福岡は新規の屋台が増えるなか、赤城さんとはいうと、ご高齢になられご自身が手がける屋台の数は減っていく。そうなる忘れ去られる存在になるかもしれない。だからこのタイミングで彼女と一緒に屋台を作り、福岡における屋台の生態系のなかに自分が積極的に入ることで、屋台の異なる見方を作品で伝えたかったんです。

編集部:社会的に目を向けられる機会が少ない個人や物事でいうと、長野さんが取材の相手に選んだ人々もまた表立つ対象とはなりにくいですね。

長野:インタビューする相手を選ぶ時に、私の普段の生活では接点がない人たちのお話を聞きたいと思っていました。ただし今回は、その人たちの劇的な変化に対する興味ではなく、人々が日々リアルに感じたことをきちんと掘り上げたいと考えていて。取材中はほとんどの対象者から「いいんですか?こんな(普通の)話で」という言葉をもらうほどでした。ご本人にとって大事ではないかもしれないけれど、私をはじめ当人以外の人にはその内容は未知の世界なので。

編集部:入手した“声”をアニメーション作品に落とし込んでいくなかで感じたことは?

長野:個人が抱えている人との間にある境界や心の壁、孤独に対して、自分がアニメーションという表現方法を選ぶのは、そういうテーマを描きやすい点があるからかもしれません。例えばある人が「孤独」を具体的にどう感じているかって一種の曖昧さがあると思っています。また、私が興味をもつ孤独とは「個人的なこと」。その曖昧さを曖昧なまま提示できるのがアニメーションが得意とする表現なのかなと。(記録という表現でみるなら)ドクペルーさんたちは実写を通して、リアリティとともに名も無い人たちの歴史を克明に残されました。それとは別に、個人の話ではあるけれど、「今」を生きている人たちのことを総体として俯瞰的にとらえる表現がアニメーションなのかもしれません。

編集部:今回みなさんが挑んだ作品づくりは、福岡のコミュニティはもとより、制作のプロセスに関わった多くの人々に託していくという部分もセットの営みだと思いますが、今回の活動と作品がこれからも福岡で生きる人たちのなかに、どのように残っていけばいいと考えますか。

ホセ:すべての人の人生は“映画”です。さらに言えば、誰もが映画の



▶ ドクペルー 上映会&トーク「記憶を編む」
(2/25開催)

監督や制作プロデューサー、脚本家にもなれる。繰り返しになりますが、今の社会では、政治やお金、権力をもつ人によって歴史(ストーリー)が握られています。私はそのヒエラルキーを打破したい。従来描かれてきた一部のの人々と同じパワーをもったレベルまで、名も無い人たちがストーリーを書く力をもつ社会をつくりたいと思っています。どんな人でも自分の物語を書く力があるし、その権利を等しくもっていることに気づいてほしいですね。

下寺:街が(機能・景観的に)美しく整備されていくことは、自然の流れだと思いますが、それまでの路上にあった生活(感)などが失われていくことや、単に古いか汚いものという見方で回避されている側面は見逃せないと思っています。街の“出来方”という部分をきちんと見直したいですね。トップダウンというよりボトムアップで街をつくれないうのかなというところが僕自身の活動の出発点です。

長野:予告編が完成した今、インタビューした人たちの生活をこれからアニメーションに起こしていく段階なので、きちんと完成版をお届けしたいですね。また、今回は福岡市民に限定しましたが、テーマ自体に地域性があるものではないため、おそらく国内外のどこでも、共通または共感してもらえるのかなと。世界的に起こった変化のなかの生活を切り取った作品を、より多くの人に観ていただき、一人でも心が穏やかになったり慰めになったりすれば嬉しいです。

編集部:今回のレジデンスを通じて見えてきた今後の活動についての展望があれば教えてください。

下寺:今回の福岡では「屋台とは何か」の問いから、動く屋根を作りました。成果展「動く屋根の下で」では、意図的にイベントやカフェを開くことで屋根の下で生まれる営みと風景を検証できたと思います。屋根があることでそこに人々が集って飲み食いし、コミュニケーションが誘発される。動くものと動かないものとの間にある、仮設的なものに対する研究をより深めたいと思っています。

ホセ:今回の(初のアジア)滞在は我々の活動における新しい第一歩ととらえています。私たちは同じ場所にとどまるより、あちこちに移動しながら制作するのが肌に合っているので、福岡で実現したWSIは、地理的、言語的な境界を超えて様々な“記憶”をつなぎ合わせる一つの大きな旅の始まりではないでしょうか。色々な差異があったとしても、記録し、歴史に残していかなければならないものが世界中にはたくさんあると思っているので、今後もそれらを多くの人々と共有したいです。

長野:当初は抱えていた不安や生きづらさを描くことで、少しでもその人がもつ不安を癒したり救ってあげたりできるかもと期待していましたが、いざ制作をはじめると、作っている私の方が救われたのか?と感ずることもありました。いずれにせよ、自分が福岡に戻ってきた時から感じていた、私自身のリアルなコミュニティと住んでいる街(コミュニティ)との乖離、そして、これほどまでに社会的な変動が起こった“時代”という曖昧な対象を今後もアニメーションという手法でとらえていきたいですね。



▲ 長野 櫻子 上映会&トーク (聞き手: 原田真紀)
「記憶と孤独と短編アニメーション」(2/25開催)
撮影:竹藤 龍祐

アジア現代美術からは「スピリッツ」を学びました

学芸課長 山口洋三

私は、長年の職場であった福岡市美術館から昨年4月に福岡アジア美術館に異動しました。

当初は驚きましたが、全く想定していなかったわけではありません。私自身の専門は現代美術です。福岡市美術時代には、主に国内の現代美術の企画、作品収集を行ってきましたが、その際、アジア現代美術、ないしはアジア美術館の活動を多少なりとも意識しながら進めてきたという思いがあります。

私は1994年4月に福岡市美術館(市美)に勤務し始めました。その年9月には「第4回アジア美術展」が開催されることになっており、学芸員含む館内職員全員が大わらわの状態でした。わずか1か月の会期の展覧会でしたが、魅力的な作品が多数出品されたことに加えて、出品アーティストのかなりの数の方が滞在制作のために来館し、普段は静かな美術館内を活気づけていました。私の現代美術の仕事はアジアとともに始まったのです。

翌年には、福岡アジア美術館(アジ美)設立のための部署が館内に立ち上がり、アジ美のための作品収集も開始されていきます。私自身はその部署とも仕事とも無関係でしたが、市美の収蔵庫には常にアジア現代美術の新収蔵作品があり、身近に感じていました。しかしアジアの現代美術が1999年開館のアジ美に移管されると、日本国内の現代美術の収集は市美の役割とはっきりうたわれたため、それをかなり意識して2000年以降は国内と海外(特に欧州)の現代美術の収集に力を入れました。

他方で、滞在制作(アーティスト・

イン・レジデンス)への興味も高まり、2002年にはアジアン・カルチュラル・カウンシルの奨学金を得て、米国3都市の美術館にてアーティスト・イン・レジデンスと美術館活動の関係を4か月に渡り調査を行いました。各美術館、開催方法も考え方も様々で決まった答えはなく、むしろアーティスト支援とは

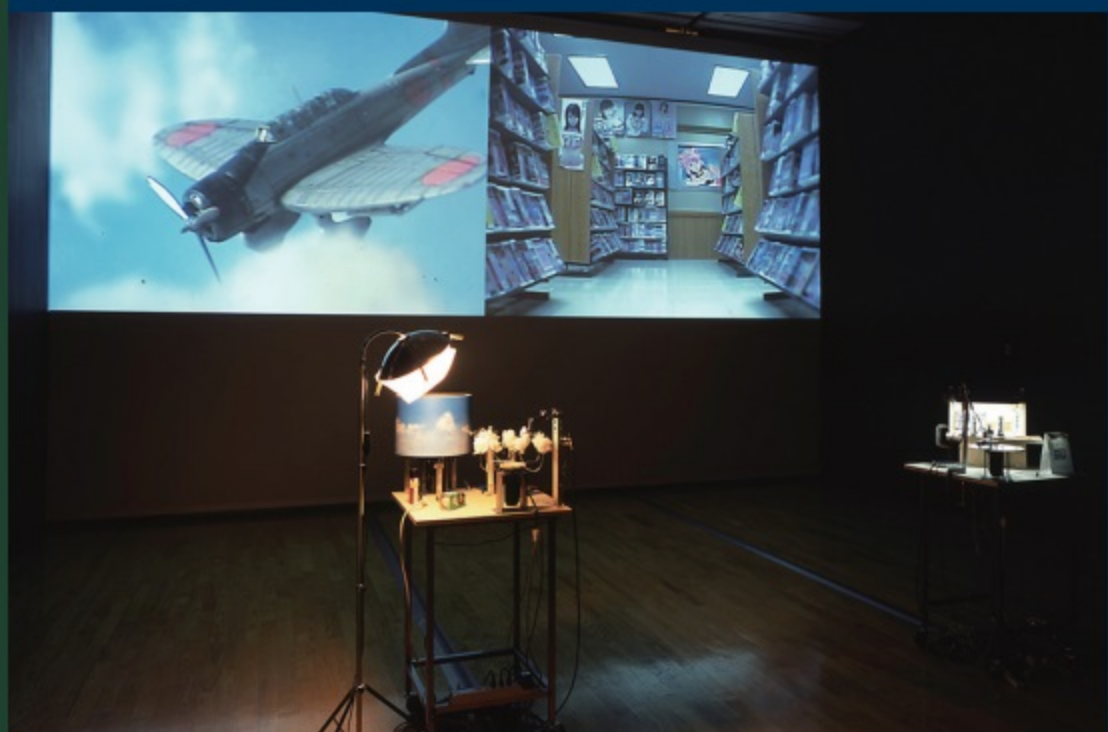
どういったものであるかを学ぶことができた滞在でした。この研修の成果といってよいかわかりませんが、私は2006年に、アーティスト中ハシクシゲさんの「震電プロジェクト」を助成金等を元に自主開催。この時中ハシさんに福岡市内に長期間滞在してもらい、地元の方々と共同制作を行いました。また、これは2014年の市美での企画展ですが、鈴木貴博さんの個展「生きろ美術館」を開催し、その折に約1か月間、鈴木さんに市美にて滞在制作をしていただきました。アーティストが作品とともにその場に居合わせることで、場所への影響、活性化といったテーマが通底していたと思います。

アジア美術館に最も接近した仕事といえば、2005年の「第3回福岡アジア美術トリエンナーレ」(FT3)です。協力キュレーターとして出品候補となる日本のアーティスト10名程度をノミネートし、結果、塩田千春さん、山口啓介さん、伊藤隆介さん、そして角孝政さんが出品しました。(写真参照)

こうして自分の仕事を振り返ると、アジ美、アジア現代美術に関する直接的な仕事はなくとも、アーティストとの関り、作品の収集において、常に何らかの形で「アジア」から「精神」を学んできたように思います。今後は、アジア美術館での活動にも生かしていきたいと思っています。



FT3での角孝政による「不思議博物館」展示風景
Wonder Museum by Sumi Takamasa, at the 3rd Fukuoka Asian Art Triennale 2005



FT3での伊藤隆介《Realistic Virtuality (現実的な仮想性): 絵画の主題》展示風景
Ito Ryusuke, Realistic Virtuality: The Subject of Paintings, at the 3rd Fukuoka Asian Art Triennale 2005



WEB「Asian Art Resource Room」OPEN!

ウェブ「アジア美術資料室」オープン!

このウェブサイトでは、当館が長年収集してきた資料を生かして、アジア近現代美術の理解を深めるための入口 (gateway) となる基本情報を日英バイリンガルで提供します。当初のコンテンツは下記の二本柱です。

1 「知る」用語集 (現在40項目)

近代以後のアジア美術に特徴的な動向・グループ・ジャンルなどを簡潔に解説します。

2 「調べる」年表 (現在約700項目)

19世紀の植民地化から近年の国際舞台での活躍までのアジア美術の展開を一覧したり、地域ごと、テーマごとに検索することができます。

専門家に限らず幅広い方々にアジア近現代美術を学び、そして楽しんでいただくために、次第にコンテンツを充実させていきますので、ぜひ使いたおしてみてください!

特別助成:公益財団法人 石橋財団

<https://asianart-gateway.jp/>

NEWS

◀トップページはこんな感じ!

◀「知る」用語集ページ (部分)

あじびの作品が海を越え、中東へ、南アジアへ!

昨年9月から12月にかけて、アラブ首長国連邦のシャルジャ・アート・ファウンデーションで開かれた展覧会「ポップ・サウス・アジア—ポピュラーな芸術の探究」に、当館の所蔵品9点が出品されました。ただいま、インドのキラン・ナダール美術館にも巡回中。あじびコレクションのグローバルな展開に注目です!



シャルジャ会場にて、当館所蔵品のアトゥル・ドディア《ガンボージ色のガッパル》前でギャラリートーク中の様子

あじびの作品が全国4会場を巡回

当館の所蔵品を紹介する展覧会「うるおうアジア」が全国4会場を巡回します。近代の名品からお馴染みのリキシャまで、多様な言語、民族、宗教を有するアジアの特色あふれるコレクション113点を、ぜひお近くの会場でお楽しみください。

《展覧会タイトル》

うるおうアジア

—近代アジアの芸術、その多様性—

《巡回会場・会期》

はつかいち美術ギャラリー (広島)

2023年5月12日 (金) ~ 6月25日 (日)

四日市市文化会館 (三重)

2023年7月8日 (土) ~ 9月3日 (日)

上田市立美術館 (長野)

2023年9月16日 (土) ~ 11月19日 (日)

小金井市立はげの森美術館 (東京)

2023年12月2日 (土) ~ 2024年1月28日 (日)



レジデンスアーティスト

滞在報告

チェン・イェン・ペン さん
 Cheng Yen Pheng

「UOB銀行絵画展2019」受賞者でマレーシア出身のチェン・イェン・ペンさん (アーティスト)が当館に2月上旬から1か月間滞在しました。これまで自分で栽培した桑の木から自作した紙を織ったり縫わせたりして作品を制作してきたイェン・ペンさん。あじび滞在中は、朝倉、筑後、美濃を訪れ、和紙づくりの制作工程や道具への関心を深めました。その成果として当館で3/5に報告会「はじめまして、イェン・ペンです」とちぎり絵ワークショップを開催。特に美濃への旅で受けた刺激を今後の制作に活かしたいと語りました。

▶ 美濃にて和紙職人の鈴木さんご夫妻を訪問、記念にパジャリ。



 福岡アジア美術館
 Fukuoka Asian Art Museum

TEL 092-263-1100

〒812-0027

福岡市博多区下川端町3-1リバーインセンタービル7・8階

<https://faam.city.fukuoka.lg.jp>

7・8F Floors, Riverain Center Bldg., 3-1 Shimokawabata-machi, Hakata-ku, Fukuoka, Japan

ギャラリー観覧時間 9:30-18:00 (金曜・土曜は20:00まで) ※ギャラリー入室は閉室30分前まで

開館時間 9:30-19:30 (金曜・土曜は20:00まで) あじびホール、アートカフェ等

休館日 毎週水曜日 (水曜が休日の場合はその翌平日) 年末・年始 (12/26~1/1)

Asia Gallery アジアギャラリー

Collection Exhibition コレクション展

アジアの近現代美術 – 黎明期から現代まで
Modern and Contemporary Asian Art: From the Dawn Age to the Present Day

あじびコレクションX「POSTWAR / 戦後」
Ajibi Collection X POSTWAR

「私」から問うーアジアの現代写真II
Ask Myself First: Asian Contemporary Photography II

境界を行き交うーアジアのインスタレーションII
Crossing Borders: Installation Art of Contemporary Asia II

3/23(木)~6/20(火)

神々の島からーインドネシア・バリ島の美術
From the Island of Gods - Art of Bali Island, Indonesia

イスラム教が多数派を占めるインドネシアにあって、バリ島は「神々の島」と呼ばれ、ヒンドゥー教と土着の信仰が混ざりあった、独自のバリ・ヒンドゥー文化が育まれてきました。本展では、バリの豊かな精神世界や日常を映し出す作品をご紹介します。

イ・デワ・プツ・セナ【イニコとコーヒーの木】1985年
I Dewa Putu Sena, Nuri Birds and Coffee Trees, 1985

今回のあじびニュースの表紙作品です！

あじびレジデンスの部屋
Room for FAAM Residence Program

「あじびレジデンスの部屋」では、「福岡アジア美術館美術作家招へい事業」(1999年開館〜)や「福岡アジア美術トリエンナーレ」で福岡にやってきたアーティストの滞在中の活動やその後の活躍などを紹介します。

Room for FAAM Residence Program Part I

記憶のなかの歴史ースティー・クナウィチャヤノン
Histories in Our Memories – Sutee Kunavichayanont

2000年にバンコクで初展示されたシリーズ作品《歴史の授業》。「第2回福岡トリエンナーレ2002」では、福岡大空襲の記憶をもとにした福岡版《歴史の授業》が制作されました。本展ではタイの文化を批判的に表現した作品《永遠なる不毛》とあわせて展示します。

《歴史の授業 福岡》ワークショップ風景(2002年)
Workshop / History Class (Fukuoka), 2002

Special Exhibition 特別企画展

水のアジア 7/1(土)~9/3(日)
Waters in Asian Art

世界水泳選手権2023福岡大会を記念した展覧会。水にまつわる神話にヒントを得た作品や豊かな命を育む自然の生態系を描いた作品、水に様々な社会を映した作品、作家それぞれの記憶にある水を表現した作品など、約30点を紹介します。また世界水泳の会場のひとつとなるポートレウス福岡の芝生広場には、風の吹き抜ける魚のベンチを置き、人びとに憩いの場を提供します。

空遊園【空遊】(竹ノ上麗子) 2019年、作家展
Eung Latham (Takami) The Sea Over There, 2019, collection of the artist. Photo by Tommaso Muzzi. ※複製禁止

プラトウアン・エンム・チャルーン・タイ【タイの海の夢】(1980年) 複製
Pratun Engimong (Thailand) Reflection of Life in Laos Leaf, 1980, Collector: Fukuoka Asian Art Museum

Collection Exhibition コレクション展

身体
Body – イメージの器 9/14(木)~12/25(月)
The Body as Image Vessels

ヌードから、デフォルメされた身体や強調された器官、産む性としての女性の身体まで、表現された身体には作者の特別な意図やジェンダーなどの社会的テーマが反映されています。絵画、写真、彫刻、インスタレーションなど、さまざまな技法による身体表現に着目してアジアの近現代美術を巡る企画です。

FaN Week

アートと環境
ー人新世を生きる
Art and Environment
ーLiving in the Anthropocene

Room for FAAM Residence Program Part II

「きのう見た夢」はどこへ?
ーコビール・アフメッド・マサム・チステイ
Where has "The Dream You Dreamed Last Night" gone? – Kabir Ahmed Masum Chisty

約150人の小学生が参加したアニメーション制作ワークショップ「きのう見た夢」は、自分の絵や音がつながって動き出す楽しい映像になりました。本コーナーでは、近年パフォーマンス作家としても国際的に活躍する作者の《罫》もあわせて紹介します。

Collection Exhibition コレクション展

身体
Body – イメージの器 The Body as Image Vessels 1/2(火)~4/9(火)

切り紙の魔術師ー呂勝中
The Magician of the Cutting Papers – Lu Shengzhong

2024.1/2(火)~4/9(火)

呂勝中は、中国民俗芸術(とりわけ切り紙や年画)を創作の源泉に、1980年代後半からスケールの大きな作品を生みだしてきた、中国を代表する美術家です。本展は、昨年未だに呂氏が逝去されたことを受け、所蔵作品を通して功績を振り返る企画です。

Room for FAAM Residence Program Part III

天空へはばたく風ースーン・ヴァナラ
The Flying Kite in the Sky – Soeung Vannara

2024.1/2(火)~4/9(火)

2002年の福岡滞在で、カンボジアの人々の希望を込めて楽器風を制作したスーン・ヴァナラ。福岡在住の日本画家との共作《共同で制作したクメールの風》や実験的な表現を試みた《影の風》など、カンボジア現代アーティストの第一世代にあたるヴァナラの足跡をたどります。

The Ancient Egyptian Museum Exhibition
The Ancient Egyptian Museum Exhibition

4/8(土)~5/28(日)

主催:古代エジプト美術館 渋谷、西日本新聞社、TNCテレビ西日本、西日本新聞イベントサービス

古代エジプト美術館展
2023年4月8日(土)~5月28日(日)

光の芸術家 ゆるかわふうの世界 宇宙の記憶
Fuu Yurukawa Exhibition : Cosmic Memory

6/3(土)~7/9(日)

《極北の空》2021年

Special Exhibition 特別企画展

おいでよ! 絵本ミュージアム2023
Welcome to Picture Book Museum 2023

7/17(月・祝)~8/27(日)

子どもたちの想像力・創造力を育むために、五感に働きかける様々な仕掛けで、絵本の世界に入り込めるような空間をプロデュースする展覧会です。17回目となる今年は、約1000冊の絵本の展示や様々なイベントを通して、「こどもの力」をテーマに子どもの豊かな感性の世界を伝えます。

昨年の会場風景より Last year's exhibition view

Collection Exhibition コレクション展

水俣・福岡展
MINAMATA Fukuoka Exhibition 2023

10/7(土)~11/14(火)

一家全員水俣病で家庭は崩壊したが、純粋無垢な笑顔を抱きかかっていた胎児性水俣病の少年、半光一光。
Photo by Takeshi Shiota 1969

Special Exhibition 特別企画展

世界遺産 大シルクロード展
A World Cultural Heritage: The Great Silk Road Exhibition

2024.1/2(火)~3/24(日) ※1/3(水)開館

東西交易の重要な道であったシルクロードは、多様な民族が興亡し、文化が融合する地でした。本展では、西安、洛陽、蘭州、新疆地域の博物館などから、日本との縁が深い唐時代を中心とした文物や世界遺産に登録された遺跡の遺品を借用し、シルクロードの悠久の歴史とひとびとの暮らしを紹介します。

《唐鎏金鹿紋菱花形銀盤》唐時代、河北省博物館所蔵
Platter with deer, Tang dynasty, Hebei museum

Exhibition Gallery 企画ギャラリー